



緑エンジン

engine

2022.3.1

vol.30

子どもたちが
自然と共に豊かに生きる
未来のために

04



**NPO法人
子どもがかける
虹の森ネットワーク**
理事長 青木千里さん

「子どもたちが将来、幸せに安全に暮らせる世界にするのが夢」と熱く語る青木千里さんは、NPO法人子どもがかける虹の森ネットワークを2010年に設立した。20年後の子どもたちが自然と共生しながら、心身ともに健康で豊かに暮らせる自然循環型社会を目指して、国連が提唱するSDGs（持続可能な開発目標）に繋がる活動に、いち早く取り組んできた。

青木さんが世界に目を向けるようになったのは高校生の時。宇宙船アポロ11号の打ち上げなど海外のニュースで活躍する同時通訳に憧れた。そしてアメリカの大学院へ留学中に、国際的な人道支援をしたいと思うようになった。英語やフランス語が堪能な青木さんは国際機関に就職して、世界の熱帯雨林の保護や有効活用のため20年間以上働いた経験をもつ。

NPO法人子どもがかける虹の森ネットワークは、「環境学習会」「親子で有機大豆・みそ作り」「親子で国際交流」という主に3つの活動を行っている。「環境学習会」は公園へ行って自然観察をしたり、どんぐりを育て苗木を植えて成長記録をつけている。昨年11

月には養蜂家を講師に招き、「親子でみつろうラップをつくろう！」というワークショップを中川西地区センターで開催した。

「親子で有機大豆・みそ作り」では、秦野市にある畑で有機大豆を育て、月に一度の農作業を楽しんでいる。3月5日に、収穫した有機大豆を使って味噌を作る予定だ。「親子で国際交流」は、外国の家庭料理を作り、その国の文化を学ぶ。昨年12月にインド人が講師となって、参加した親子は民族衣装のサリーを着付けてもらったり、キーマカレーやターメリックライスなどを一緒に作りながら、インドの国のことや地球の環境についての勉強もした。

こうした実体験を通して、子どもたちが世界へ目を向け、地球のことを考え、少しずつでも行動することの大切さを実感してくれることを、青木さんは切に願っている。

青木さんは横浜と海外の子どもをつなぐネットワークづくりを計画しており、「今後は子どもの国際会議を開催したい」と考えている。子どもたちが地球環境の現状を知り、海外の子どもたちと学び合えるように展開していく予定だ。活動を継続していくために「人材・資金・広報力」という課題がある。現在、運営メンバーを募集している。関心のある方は、ぜひご連絡いただきたい。

取材・文=市民ライター・石野恵子

03 おはなしネットワークかたららん

メール moro3281@yahoo.co.jp

TAMおやこのひろば

ブログ <https://tamoyako.blog.fc2.com/>



04 NPO法人 子どもがかける虹の森ネットワーク

メール CRFN.jp@gmail.com

フェイスブック

<https://www.facebook.com/CRFNJapan>



問い合わせ先

01 早瀬川ファンクラブ

フェイスブック

<https://www.facebook.com/groups/hayabuchi.river/>



02 つづきっ子読書応援団

ブログ <http://libraryfun.net/tdo/>



何かを始めるきっかけマガジン「緑ジン」 2022年3月 第30号

編集/企画：都筑区民活動センター

発行：都筑区役所地域振興課

問い合わせ

都筑区民活動センター

横浜市都筑区茅ヶ崎中央32-1都筑区役所1階

045-948-2237

tz-katsudo@city.yokohama.jp



HP



緑ジン
バック
ナンバー



地域活動の楽しさ 面白さを聞く！

「早瀬川ファンクラブ」は、月に2回、早瀬川やその流域をキレイにする環境美化活動を行っています。

その他にも週末に、有志で朝活星くず拾いを実施しています。この日は様々な年代の3人で楽しく作業を行い、早瀬川がキレイになりました。(詳細は中面記事参照)

contents -----

- ミニ特集
地域活動の楽しさ・面白さを聞く！

ミニ特集

地域活動の楽しさ・面白さを聞く！

都筑区民活動センターには、200もの市民活動団体が登録をしています。その他にも、地域で様々な活動を継続している人たちがたくさんいます。今号はミニ特集として、都筑で長く活動を続けている4名の方に、地域で活動を続けている原動力、楽しさ、面白さを聞きました。

活動風景

01



02



03



04



住みやすい街づくりの フロントランナー

早瀬川ファンクラブ 名誉会長 福富洋一郎さん



「いい街にはいい川がある！都筑区には早瀬川がある！」ゴミ拾いで環境美化を推進する「早瀬川ファンクラブ」（旧「早瀬川をかなでる会」）名誉会長の福富洋一郎さんの言葉だ。1988年、福富さんは44歳で世田谷区から港北ニュータウンに転居。1994年7月、ごみがたくさんあり、水質も悪かった早瀬川をクリーンアップする「早瀬川をかなでる会」を発足させ、代表となる。地道な地域活動のおかげで、2007年「早瀬川親水広場」がオープン、早瀬川はきれいで遊べる川となった。福富さんは、都筑区誕生（1994年11月）前から、30年ちかく継続して、街を暮らしよくする地域活動のリーダーとして先頭を走ってきた。

幼少期から歴史と地図が大好きだった福富さんは、流域歴史ウォーキングのツアーガイドもする。早瀬川や都筑の歴史、地理に精通し、語り出したら止まらない。「自分の知っていることを伝えるのが、なにより楽しい。自分の好きなこと、やりたいことを地域で生かせる。何かやりたいというと、やりましょうと言ってくれる仲間がいる」「何が好きかは人それぞれでいいし、変わってもいい。やりたい人が、やりたいことを、やりたいときにやれるのが地域活動の醍醐味。ワクワクと楽しいことが大事。面白く楽しいから続く」と、福富さんは笑顔をほころばせる。「人の役に立つことがただうれしく、やりがいを感じる。自分はそういう体質なだけ」と、謙虚で自然体だ。

01

01 早瀬川ファンクラブ
（1月の定期環境美化活動）

02 つづきっこ読書応援団
（ちょっぴり怖い夜のおはなし会）

03 おはなしネットワークかたらんらん
（歴博まつりにて）

04 NPO法人
子どもがかける虹の森ネットワーク
（親子でインドの文化と料理を楽しむ会）

活動は川づくりにとどまらず広範だ。本好きでもある福富さんは「つづき図書館ファン倶楽部」、「つづきっこ読書応援団」、「都筑図書館の未来を描く協働の会」など図書館の応援活動にも参加している。さらに、区民と行政との協働によるまちづくりの「都筑魅力アップ協議会」、「都筑ふれあいの丘まちづくり協議会」（会長）と、住民目線の意見を発信し、様々な地域活動に奔走する。次世代の参考にとこれまでの活動をまとめたスクラップブックは3冊に及ぶ。

今後について、「新しい世代が自分たちの夢を自由に描いて一步一步取り組んでほしい。良い取り組みは、行政、企業、自治会も動いてくれる。すでに新しい世代が地域で活動していて、令和時代の幕開けを感じている。より良いまちづくりのテーマは永遠にあり、つきることがない。ぜひ次世代につなぎたい」目を輝かせながら語る福富さん。いい街には、地域活動のいいフロントランナーがいる！都筑区には都筑を心より愛する福富さん（福ちゃん）がいる！



取材・文=市民ライター・井野文子

子どもの読書を 応援し続けて

つづきっこ読書応援団 代表 三田律子さん



02

本が好き、活字が好き！と話す「つづきっこ読書応援団（TDO=つどおう）」代表三田律子さん。子どもの頃から家にある百科事典を愛読するほどの根っからの本の虫。都筑区に転居して十数年。夫の転勤であちこちに移り住んできたが、その都度、本を通じて知り合いができたので寂しくはなかった。都筑区に来てからも、培ってきた人脈を生かし、積極的に図書館ボランティアに関わるようになっていった。

活動を続ける中、子どもの読書を応援したいという思いが湧き上がった。そこから、つづき図書館ファン倶楽部主催で、連続講座『つづきここの読書環境を良くする応援団になろう』が開催されることになった。その時の参加者によって結成されたのが「つづきっこ読書応援団」だ。願い通りの子どものための団体だったが、活動は一筋縄ではいかなかった。

一言で本のボランティアといっても、学校と地域では活動の目的が異なり、一緒に活動することは難しかった。しかし、子どもの読書を応援したい思いは共通だったため、企画部会、学校部会、勉強部会の三つの部会に分か

地域活動は ライフスタイルのひとつ

「おはなしネットワークかたらんらん」代表であり、また「TAMおやこのひろば」を立ち上げ、現在は委員として20年以上の長きにわたり、地域で活動している毛呂宏子さんにお話を伺った。

「おはなしネットワークかたらんらん」は、民家園での「いろいろたおはなし会」や、コロナ禍前までは近隣の小学校でもお話し会をするなど、幼児から大人までを対象に、お話しを楽しさを届ける活動をしている。お話し会が終わり「短かったね」と子どもたちから言われると、毛呂さんは思わずガッツポーズをしたくなるという。なぜなら、子どもたちの反応は様々だが、「長かった」はつまらなかった、「短かった」は楽しかった、という最高の褒め言葉だと感じるからだそう。子どもたちの素直な反応を見られることが毛呂さんのやりがいにつながっているのだと感じた。

月1回の定例会では活動のことだけでなく、子育ての悩みや日々の出来事を報告しあえた。気楽に集まれる所があり、仲間がいたからストレスが溜まらず続けてこられた。かたらんらんの活動を始めて数年後、「TAMおやこのひろば」の事務局を立ち上げ、代表として活動を始めた。

年4回の舞台鑑賞のほか、キャンプやお祭りなどの活動は会員である親子みんなで協力して取り組む。

れて活動することになった。そこから今に至るまで活動は広がり、企画部会からは図書館や地域で読み聞かせをする「つどおうJijiBaBa隊」、学校部会からは学校ボランティアの悩みや活動を共有する「学校図書館ボランティア大交流会」やリユース図書の回収、勉強部会からは絵本勉強会マドレーヌや、「わらべうたわらしっこ会」など多くのグループが生まれている。活動が分かれてもうまくいっているのは、それぞれが考え方の違いを認め、情報共有しているからでは？と三田さんは分析する。そして、代表としての役割を何うと、何かをやりたい人たちが自分たちでやれる環境を作るお手伝いすることだと話す。

一方で、活字離れが進む子どもたちに向け、本の魅力を紹介するブックトークも行ってきた。その延長で三田さんが今一番力を入れているのは、「ぶーびーラボ」として活動している、読書と体験を織り交ぜた講座だ。本で調べたことを、実際に目で見て触って学べるのが特徴で、参加した子どもたちにも好評だ。三田さんは、「子どもたちが知らないことを知ったときの顔を見るのが、たまらなく嬉しい！」と目を輝かす。自分がおもしろい、楽しいと思うことを続けてきたと話す三田さんは、これからも子どもの自ら知りたい気持ちを応援したい、知的好奇心をくすぐりたい、と情熱を燃やしている。



取材・文=市民ライター・小林涼子

03

おはなしネットワーク かたらんらん 代表 毛呂宏子さん



企画、準備、当日の会の進行等、様々な体験を通して親子共に成長していくなかで、失敗することも上手いかわからないこともある。

毛呂さんは「うまくいなくてもいい。失敗しても次がある。だから続けていることが大事」と言う。失敗から気づきを得て、仲間と考えトライアンドエラーをくり返しながら「みんなで自由に色々できる」。そのおおらかさ、柔軟さが長く続く一因なのだろう。

TAMの活動でもかたらんらんと同様に、仲間とわいわい活動しているうちに自分が満たされる。仲間と活動の問題を解決していった経験。それが自身の普段の生活や子育てにも役立った。活動を続けているうちに自信が持てるようになり、プラス思考になったそう。「仲間の存在なしには活動は続けられなかった」と話す。かたらんらんとTAMの活動以外にも、パートの仕事や趣味の陶芸、家族と過ごす時間、と忙しくも充実した毎日のようだ。

「活動は今後もライフワークとして続けたい。コロナが落ち着いて元のような活動ができれば」と太陽のような笑顔で語った。

取材・文=市民ライター・荒井典子・加瀬智子